

人間科学研究所シンポジウム

これからの子ども虐待防止論

修復的モデルの探究

牧 真 吉

(名古屋市児童福祉センター相談課主幹・精神科医)

二 宮 直 樹

(愛知県中央児童相談所心理判定員)

団 士 郎

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

コーディネーター：中 村 正

(人間科学研究所・立命館大学教授)

(立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホール、2002年2月17日)

中村：シンポジウムのテーマは「これからの子ども虐待防止論 - 修復的モデルの探究 - 」です。この間、児童虐待の防止に関する法律、ストーキングに関する法律もできました。ドメスティック・バイオレンス、つまり配偶者間暴力に関する法律もできました。形は違いますが、民法の一部改正で実現しました成年後見制度も老人虐待の防止に活用されることがあります。夫婦間、男女間、親子間という関係に起こるさまざまな問題について矢継ぎ早に関連の制度ができ、法律相互の整合性や理念が十分に議論されることなく、どちらかという和家庭内暴力をセンセーショナルに報道するマスコミと科学的な根拠もなく虐待が増えたと結論する研究者、体罰によるしつけを続ける親への批判などが複合的に共鳴しあい、危機感に煽られて、家庭という領域に介入する「法化現象」がみられるということになっています。そのうちのいくつかの法律は議員立法として出されました。議員立法では、とりあえずつくった後、3年後に見直すという付帯決議がつくことが多く、緊急対策的であることがうかがえます。

家族、男女などの身近な関係に宿る、時には人権にかかわる問題についてどのようにしたらいいか、総論あるいは理念のレベル、対策として既存の社会資源を

どう組みあわせるかというレベル、援助の技法にかかわるレベルなど含めてトータルに議論されることなく進んできたように思います。しかも暴力や虐待など人の命にかかわる問題が入っていますので、処罰する、取り締まるという発想も出てまいります。いろんな議論があり、出版としても「虐待関連書籍流行り」です。新聞などメディアも必要以上にさわぎます。どうしてこんなにも虐待について騒ぐのか、本当に虐待は増えているのか、冷静になって考えてみることも必要だと思い、このシンポジウムを計画しました。そして、仮に虐待的な現実が発見された場合にどうしたらいいのかについて、親子分離するだけではダメだろうということで、修復的モデルの探求という方向性についても深めてみたいと思っています。総論的に虐待の定義を議論するのではなく、私たち一人ひとりができることを見定めながら一つのモデルを考えたい。今日のパネリストの間で「修復的モデル」について必ずしも意見が一致しているわけではありません。社会的にも「これが修復的モデルだ」というものがあるわけではありません。言葉使いも多様です。修復、回復、再統合などです。とはいえ、虐待についてきちんと議論をしておきたいという思いは共通しています。今回のシンポジストは、子ども虐待防止論に新しい試みをしていきたいと思っている人たちばかりです。その思いを共有しながら「修復的モデル」についてどんな話の広がりができるか。私も含めて四人で考える時間を設けさせてもらった次第です。今後の児童虐待防止論、児童虐待防止法の見直しに必要な観点を共有できればと思っています。一つの方向性として「修復的モデル」と置きましたが、そのことに込めた意味を、それぞれの幅の中で拾っていききたいと思っています。

今日は「修復的モデル」を探究するにあたって、独自の考え方をもちの方々をお招きしました。牧真吉さんです。名古屋からお越しいただきました。二宮直樹さん、現場の児童相談所で心理判定員としてご活躍です。団士郎さんは本学の応用人間科学研究科で教授としてご指導いただいています。長らく京都府の児童相談所でご活躍でした。私は人間科学研究所専任研究員で家庭内暴力について研究しています。今日は虐待、暴力についての啓発的な講座ではありませんので、定義、総論的な話は抜きにして話を始めてまいりたいと思います。

牧：今、児童相談所に常勤の精神科医は日本中で20人程度です。すべての児童相談所に精神科医は非常勤ではいるのですが、全国に157児童相談所がある中で常勤の精神科医は全国合わせてたった20人しかいないのが現実です。私は名古屋で7年ほど児童相談所にいるのですが、だんだん自分が精神科医じゃなくなっていくような気がして、児童相談所に精神科医を置いても意味があるかなと正直言っています。自己矛盾を抱えています。

私自身が考えている、今進みつつある子どもの虐待の対策があるわけですが、私があまのじゃくなのか、素直じゃないだけなのか、「これでよかった」というものが一つも出てこないで、自分の思っていることを勝手にお話します。偏った話をしていくことになると思いますのでご了承をお願いします。今、虐待について言われていることへの批判から話が始まります。

Child Abuse、「虐待」という言葉に私は反対しています。あえて使わないといけない時は専門用語として使いたいと思います。日常用語とは違う意味で使っているということです。ではChild Abuseは何が問題なのか。「関係性の発達障害」というのが、Child Abuseに起こっている一番の問題ではないかと考えます。主流の人たちは「トラウマ」という考え方で話をしているのですが、私自身はどれもそれは違うのではないかと考えています。

子どもは発達していくものなのです。発達の過程において適切な環境に置かれないと何が起きてくるか。それは「発達障害」になります。従来の精神医学の考え方でいうと「発達障害は先天的なものだ」という考え方でですね。でも環境が適切でなくても発達はうまく遂げられないということもあるわけです。いろんな発達の問題がおきてきます。Abuseを受けている子どもの中には身体的な発達だって遅れてきて「愛情剥奪症候群」になります。そういうお子さんは身長も低いわけです。Abuseを受ければ身体的な発達も当然遅れてくるわけです。mental retardation、公式用語は「知的障害」になりましたが、あくまでも行政上の用語です。医学用語では依然として「精神遅滞」です。そういうことも起きてくるわけですね。

でも私が思っているのは「関係性の発達障害」がメインじゃないかということです。関係性とはどういうものか。昔、「情緒障害」という言葉がありました。情

緒ってわけがわからないですね。私もわからない。でも未だにちゃんと児童福祉法の中に「情緒障害児短期治療施設」とまことにわけのわからない施設がございます。児童福祉領域にいる方はご存じですが。何と京都市の情短は土日休みだそうですね。聞いてびっくりしていますけど。わけがわからないところあります。情緒障害を短期で治すというのは。情緒障害とは何か。実は今、そこにたくさん入っている子どもたちは、一つは虐待された子どもたちです。もう一つ最近増えてきたのは、アスペルガー症候群です。どっちもある意味では関係性の発達障害だと思っております。Abuseの子どもたちは、私たちが話をしても「なんでこの言葉をこんなふうを受け取っちゃうんだろう」ということが起こってくるわけです。こちらが話していた意図と違って伝わっていってしまう。これは関係性の障害だと思う。人によっては「認知の障害」だと言うでしょう。人物画を描いていただきますと「IQからするとせめてこれくらいの人物画を描いてほしい」と思うのに全然そうじゃないレベルの人物画を描かれてしまう。対人関係の認知が歪んでいる結果として人物画も歪んでくるのではないかと考えていますが。関係性の発達がうまくいっていない。

私自身、実は関係性を考える時、根本は、アスペルガー症候群を含む「自閉症スペクトル」のあたりから考えています。私たちは言語を用いる以前にすでに人と人とのかわりの中で了解できることをたくさん持っていますよね。自閉症スペクトルの診断をする時、「下の2歳くらいの子どもにはわかるのに、5つになったお兄ちゃん、お姉ちゃんがわからないことはないですか？」と聞きます。言葉が通じないように思えることがしばしばあります。私たちの会話は言葉で成り立っていると大人は思っていますが、言葉以外にもっと重要なことがたくさん起きているんですね。その部分は私たちも残念ながら意識化できておりません。そのあたりにどうも歪みを来している。でもそれは歪みではないんですね。本当は「発達の障害」と考えた方がいいかもしれません。うまく発達してこれなかったということです。

そういう視点からすると、「虐待」している親の方も社会ですごく孤立しているんですね。関係がうまくとれないということです。そういう人がしばしばシビアなChild Abuseを起こしてしまう。中には運悪く命を落としてしまう子どももいる。

これもついでに言いますと、新聞報道は騒ぎ立てますが、Child Abuseによって亡くなる人は全然増えてはいないのです。これの出典は愛知県のCAPNA（子どもの虐待防止ネットワーク愛知）が新聞で調べて虐待による死亡統計を出しています。無理心中を除きますと、大体60ケース前後です。無理心中は変動します。全体で100から120前後です。虐待通報が倍倍ゲームで10倍にもなっているのに死亡そのものは増えておりません。虐待を考えるとこのことは知っておいてほしいことです。

関係性がだんだんおかしくなっていることが一番の問題として考えていかなければならないことだと思っています。そうすると「関係を結ぶ」ようになることが「修復」なんですよ。関係が切れる」ということは「悪化する」ことになるわけです。一番簡単な「関係を切る方法」は、第三者的な立場になるということです。自分がそういう現象から離れて第三者的立場になって話をするようになったら、これ、関係成立してないですよ。その代表って何だと思いませんか。皆さん。実はこれが一番言いたかったんですけどね。マスコミですよ。私はマスコミに腹が立っているんです。マスコミは第三者的立場、関係が切れたところからものを言っているんですよ。「関係の障害」がある人に「関係の切れた」ところからものを言って「修復」できるわけがないですよ。どんどん「悪化」させていきます。

もう一つ、国の政策である「虐待通報の推奨」というものです。「どんどん虐待通報してください」ということです。これも通報だけでは第三者になりますよね。通報して後は児童相談所がやってくれる。私は児童相談所にいるから、通報受けたら大変なんですよ。正直にいうと、「通報なんて来ない方がいい」とどこの児童相談所も思っているのではないのでしょうか。通報したらホッとされるのが一番困るんですよ。それは関係を悪化させるからです。「修復モデル」からいったら全然逆の方向なんです。実は2年ほど前、似たようなシンポジウムをやった時、シンポジストの団さんが面白い話をされました。「隣の家で起こった虐待にどう対応するか」、「『うるさい』と言って怒鳴った」というんです。あれは私にとって、こういう考え方を、すごくいいヒントになっているんです。

関係をいかに結んでいくか。考えてみますとね、これまでの児童相談所は親と

の関係を結ぶことにものすごい努力をしてきたんですよ。児童虐待について、この間の国の政策は、児童相談所が親と関係を結ぶことを、正直言って破壊しようとしているとしか考えられないです。「子どもを家から引き揚げてこい。命を失っては大変なことだ」。もちろん子どもを保護することが時には関係を結ぶきっかけになります。けど今の国の言っているようなやり方で、どんどん子どもを引き揚げてきたら、本当に親との関係を結ぶことになるのだろうか。一番恐ろしいのは虐待対応班が突っ込んで、引き揚げてきて、引き揚げたら「交代、次の人」とやられたら、こんなもの、関係をどんどん切断していくことでしかない。関係を破壊することになるんですね。虐待は増えこそすれ、減ることはないんですよ、こんなことをやっていったら。

最近こんなこともありました。保健所の保健師さんが家庭訪問をして健診をした。「ちょっと危ないな。要管理ケース」と保健所ではなる。家庭訪問をしてケアをしていて関係ができて「病院に行きましょう」と。お母さん自身が精神的な病気を持っておられて「病院に行った方がいい」と言う。お母さんも病院に行ってくれているんですよ。ところが、この保健師さん、児童相談所に通報すると共に母の負担を軽減しようと「大変だったら子どもを一時保護しますよ」と言ったことで、その後の関係が切れてしまいました。「私から子どもを取り上げるために保健師さんはやってきていたのだ」と思われてしまったのです。援助というように思ってもらえず、これ以上つながっていると子どもをとられてしまうと思われたのでした。ドラマでも「児童相談所です」と子どもを引き揚げていってしまうのがよくありますよね。今、児童相談所はそういうふうにししか理解されていないんですよ。そんなふうに児童相談所がなくなってしまった時、Child Abuseの対策はどんどん悲惨な結果になっていく。

関係ってというのは、その中で「一緒に苦しむ」ことによって初めて結ばれることが多いわけです。私がすごく腹を立てているのは「虐待防止対策のマニュアルをつくりなさい」というものです。マニュアル通りやりなさいというのです。責任を免れるためのマニュアルでしかないんですよ。そんなことをしても関係は生まれてきません。関係ってというのは一期一会なんですよ。その一回が勝負なんです。その一回の勝負をどうするか。それには残念ながら命を賭けざるをえな

いです。命を賭けるということは自分の命も賭けるけれども、子どもの命も賭かるんですよ。安全になるためだけに方策を打った時には関係はなかなか生じないだろうなと私自身はそう思っております。危険性を共有できてこそ、苦しみを共有できてこそ、関係が生まれてくる、というふうに私自身は思っております。

以前の児童相談所はしきりにそういうことをやってたんです。少なくとも虐待問題がこんなに騒がれる前、児童相談所は地道な仕事をやっていました。目立たないですけども。今は通報の件数が増えたおかげで、結果は惨憺たる状況です。地道にやることができなくなりました。苦しみを共有している時間がなくなりました。一体何をやっているんでしょう。児童虐待防止法は虐待を増やすためにつくられたのかもしれない、というふうに私は思ってしまうことがあります。

関係を結ぶためには大変なことを一緒になってやっていくしかないんですよ。Child Abuseをしてしまう親というのは大変な状況にあるわけです。その大変さを共有できない限り、関係を結ぶというところには行けないのではないだろうかと思っております。今、児童相談所は児童相談所の身の安全を図って行動をしているとしか思えないことが本当に多いんです。事実、うちの児童相談所もその通りです。死亡事件が報道されて以降、「一人も死なせてはいけない」という言葉かけのために、安全のためにとる行動がどんどん増えてきています。これは一体、役所だけがやらせているんでしょうか。私たち自身がつくっていかなければならない社会というものを考えないと、どんどんおかしな方向に行ってしまう。少なくともそこから考えていかないとChild Abuseの問題は解決がつかない。

私自身は正直言って解決がつくと思っておりません。Abuseの一番すごいことをやっているのはどこか。Abuseというのは力によって弱いところをねじ伏せるわけでしょう。代表格はアメリカ合衆国ですよ。力によってまさにねじ伏せんとしています。残念ながらAbuseという現象をなくせばいいとは思っておりません。人間にはつきものなんだと思っています。それが悪だというつもりもございません。けど、そういう中でどう考えていくのか。美しいことを言ってたっしょうがないんですよ。私たちはそういう宿命にあるんです。その宿命を引き受けていく中で何ができるのか。

虐待防止法の中で私が大嫌いなのは、「何人も児童虐待をしてはならない」とい

う条文です。Abuseはなくなるし、皆がAbuseしているのではないか。でもそう思ったら多分、一緒になって苦しみの中で何か得ることができるかもしれない。そこからしか始まらないのではないかと私自身は考えております。そういうことを考えていると「自助グループ」は一つのあり方かもしれないと思っております。

もう一つ大事なことは社会の水準が上がっていくことは私たち、とてもいいことのように思ってるんですけど、結果としてAbuseが起こってくることもある。子育ての水準が上がったから、子育ての水準についていけない人がAbuseになっている。昔はいい加減だったでしょ。殴っているのがあたりまえだし、ワシントンも桜の木に縛りつけられましたよね。そういう時代にはAbuseってそんな問題にならなかった。水準が上がっていくということは残念ながら子育ての仕方底辺にいる人たちが目立つということです。考えてみてください。知能指数は連続しているんです。子育ての水準も連続しているわけですよ。知能指数だとあるところから下は障害者となるけど、そこに近い人たちは障害者じゃないんですよ。でもそこに近いところにだって人はいるわけですよ。私たちはそういうふうにとずっとスペクトル的にいるわけです。世の中には養育水準の低い人たちがいて、私たちはそういう人たちとどうやって一緒に生活していけるのか。その時には場合によっては目標を下げるのが大事じゃないか。「世の中こうだから、このレベルでやってもらわなきゃ」ということ自体、私たちのそういう人たちに対するAbuseかもしれませぬ。

「一緒にやっていく」ということは、実は簡単なようでなかなか難しいと思います。ノーマライゼーションはどういうことなんだろう。あまりカッコいいことはないんじゃないかな。かなり泥臭いレベルのことでやっていくしか仕方がないんじゃないかというふうに思っています。

中村：ありがとうございます。シンポの打ち合わせに名古屋の職場に行って話をお聞きしたのですが、その時には淡々と意見を語られたのですが、今日はずいぶん思いのこもった発言だったと思います。最初に発題をお願いしたいのはこういう背景があります。マスコミのことも話されました。現行の児童虐待防止の

システムの話もされました。それを重ねていきますと、児童相談所以外の方で、児童虐待に関心をもった所以をたどっていきますと、もしかしたらマスコミもっているストーリー（コミュニケーションモード）に行き着くかもしれない。現行の虐待防止システムのもつ問題性に行き着くかもしれない。そういうことと重なるところがありまして、最初の問題提起者として話をさせていただきました。いろんなつながりをどう回復するかということで、一つの「修復」への示唆があったかと思います。「スペクトル」という表現で指摘されたあたりは、社会を構成する私たちへの問いかけでした。関係を切つてはいけないというメッセージも強かったと思います。

二人目は愛知県の児童相談所で仕事をされている二宮さんです。心理判定員と名前はついていますが、多面的にソーシャルワーク的なことも含めてやらざるをえない現実があるかと思っています。今の話を受けまして思うところをご発言、お願いします。

二宮：一応、心理屋の二宮です。牧先生も児童相談所に来ると、だんだん医者でなくなっていくということですが、私は最初から児童相談所ですから、最初から心理屋じゃないようなところがあるのです。

今のお話では「子どもを引き揚げて保護すればよしということではだめだ」と。そこから私の話が始まります。児童虐待防止法ができました。実態は「子どもを保護すればよし」というような法律ですが、一応「虐待した保護者を児童相談所が指導せよ」というニュアンスが書いてあるわけです。そこで私たち真面目だから、何かやらないといかんと思ってしまった。児童相談所がやることになるのだとすると、心理屋ですから「我々の力量が問われるのだろう」と内部の研修会で話をしていました。とりあえず何かやるしかないわけで、子どもを施設に保護して、親に対して児童相談所が指導しますから定期的にお会いしましょうという。向こうは「どうやったら子どもを返してもらえるんですか？」といいながら通ってくるころまでは、何とかできたんです。ところが、この先どうやってアプローチするかが問題でした。

厚生労働省自体も親の指導、親のカウンセリングのため、各児童相談所に精神科の医者を非常勤で配置するとか予算をつけるようになりました。他にも、児童福祉施設に心理セラピストを非常勤で入れる。これは虐待で傷ついた子どもを治療するためです。虐待をした親も、「世代間連鎖論」ではないですが、「心に傷を持つ悩める人」ですから、親を指導することも心理治療的、セラピー的にやろうという感覚で対策を打ってきているわけです。心理屋さんは「トラウマ論」とか本が出れば即、読みます。読まないわけにいかない。正直言って、私は最初から好きじゃなかったんですけど、読まざるをえないということで勉強しました。

そういう感覚で、いざ虐待をした親と面接をしますと、その人の生育歴なんかを聞きたくなるわけです。聞けば答えます。向こうは「どうしたらよろしいでしょうか」と真面目に来ていますから。虐待する親って意外と真面目だと思います。

今日お話できるのは、まだいろんなプログラムが開発されていませんので、身体的虐待をした父親をターゲットにしたモデル的なプログラムです。ネグレクトまではまだ適応できないだろうと思っています。典型的な身体的虐待をする親のイメージです。

子どもを保護すると、最初は喧嘩になります。「何でや、不当な介入だ」となるのですが、児童相談所が「返しません」となると向こうも勝てない。「しょうがない。もう虐待はやらんから子どもを返してくれ」と親はいいます。でも児童相談所は、そんなの「絶対やりませんといっても信用できませんね」ということになる。すると向こうが「どういう条件をクリアしたら子どもを返してくれるのか」と真面目な話になってきます。そこで「児童相談所に通いなさい」と言うわけです。

児童相談所に通ってきたら何をやるか。こちらには何もないので、とりあえず「トラウマ論」とかでカウンセリングやろうかなという感じで始めるんですね。向こうは真面目ですから聞けば答えるんです。カウンセリングは相手の話をどう傾聴するかですから、向こうがしゃべってくれないと発展しない。ところが聞かれたことは答えますが、それ以上は言いません。しょうがないから、こちらから質問をしていきます。するとそのうち、「俺と親父のこと聞いて、何の関係があるんだ」ということになって、向こうがイライラしてきます。そうこうしていると

「昨日、児童相談所に電話したけど、何だ、あの態度は」と児童相談所の揚げ足をとって喧嘩腰に戻ってしまいます。でも何とかまた来るんです。ただし「あと何回通ったら子どもを返してくれますか？」という態度です。困りました。カウンセリングにならないからです。「このまま行くと喧嘩別れかな。喧嘩別れになると困ったな。いつまで経っても子どもを返せないな」と追い詰められた状況にはまってくる。

「何かうまい方法はないかな」と思っていた矢先、NHKがアメリカのグループでやっている「親業トレーニング」、心理教育的なプログラムをテレビでやっていました。これを我々の心理判定員の研修会で見ました。その中でソーシャルワーカーがインタビューを受けていて、「私たちがやっているのは心理療法とは違う」とあっさりおっしゃった。そこで我々も「そうなんだ」ということで、心理療法的というのを捨てましようとなったんです。とにかく相手との面接関係を維持していく。「動機づけ」を維持しいてくだけで汲々としている段階ですから、人格の深いところまではやれない。とりあえず「子どもに対して暴力を振るわない」というところに焦点を当てて、そこをわかってもらおうと。そのためには、一対一ですが「親子関係トレーニング・プログラムをやります」と方針を変えたんです。変えますとね、一触即発じゃないけど、喧嘩別れに終わってしまいそうだった相手が乗るんですよ、スツと。素直に乗ります。これは「私は先生」「あなたは生徒」という関係です。虐待をする親は権威主義ですから人間関係がタテ型です。タテ関係の方がおさまりがいい。

ところが、我々は具体的なプログラムを何も持っていません。泥棒を捕まえて縄をなうどころではなく、必死になって何かないかということで、とりあえず「子育て支援のビデオを見ましょう」とビデオを見せる。「子どもはこういうものなんですよ。お父さんどう思われましたか？」と聞く。そして相手の感想に対して「子どもっていうのは…」と確認する。お勉強なんです。何回か勉強のプログラムをやっていきます。「それを身につけて卒業できたら、きっとお子さんをお返しできるようになるのではないのでしょうか」と宣言する。向こうは「これをやれば子どもを返してもらえる」と思うようになるので、やることがはっきりしてきてやる気になる。それまで治療面接をやっていると「何をしゃべっているのだ」

と思っている。「面白くない話だし、こんな話をして子どもをいつ返してくれるのか」と。それが、提出される課題を一つひとつ解いていくと子どもを返してもらえると動機づけが高まるんです。とても関係がよくなる。

こちら相手への期待に応えないといけませんから、「来週は何をやるのか」とプログラムを考えていく。次に考えたのが「ロールプレイ」です。職員も二人にして、夫婦でロールプレイをする。子どもの役をやって父親の役をやる。台本をつくってやるとかの配慮をします。子どもが言うことを聞かない場面です。たとえば親が「歯を磨きなさい」と言うと子どもが「嫌だ」と言った。「さあどうしましょう」という場面をやる。実際に家庭で起こった虐待の場面を入れたのです。こうしたロールプレイでいくつかの場面をやっていく。

5回、10回と面接を続けていく。そこで一段落したところで施設のお子さんとの面会から始めて、半日帰省、一泊帰省というプログラムも入れながらやると、どんどん動機づけが高まってくるので、向こうもさらに「頑張ります」と言うわけです。

プログラムの始めは、大抵は真面目なんだけれど、ちょっとしたことがあると反抗的とか、ケチをつける態度に変わります。こういうプログラムをやればどうなるかということとはわかってないのですが、そうしたことが無くなり、何となく「大丈夫そうかな」という感じになってきます。終わり方について、最初はセラピーの感覚で考えていました。セラピーは形式上対等です。クライアントがセラピストから自立して終わっていくというのが理想になるんですが、どうもそんなことはできそうにない。「私は先生、あなたは生徒」ですから、自立し卒業するのはいつになるかわからない。無限に続けないといけないのかと思っていましたが、結局は、ぼちぼち「大丈夫だろう」ということで仮免許で卒業させればいいのではとなりました。親業プログラム自体に終わりではなく、無限に先がありますが、「あなたのこれまでの努力と学習に免じて仮免許を差し上げます」と言って子どもを返すのです。ここで一旦終了します。もし子どもとの関係で何かあればプログラムの続きがありますから、そこから始めましょうという形です。

児童相談所とクライアントの関係は権威的な関係を維持しっぱなしなんです。多分、それがあある意味では効を奏することもあると私は思ってるんです。「それで

本当に大丈夫か？」と言われるのですが、やった私たちには「大丈夫だろう」という感覚があるんです。話だけを聞いた人は「子どもを返してまた虐待が始まって殺されたらどうなる」と言われるし、そういう事件も実際に起こるものですから慎重になります。教育しただけと思われるかもしれないけれど、やってみてわかったことは、パラドキシカルな話ですが、「これはセラピーではない」というところから我々のやり方が生まれたんですが、じつは「セラピーではないというセラピーなんだ」という気がしています。「プログラムの一つひとつの内容はあまり関係がない」というと乱暴ですが、学習プログラムを着実にやっていくこと、「この先生は子育ての専門家だ」と思ってもらって、勉強をやっているのだという気にさせることが大事なんです。「仮免許」で終わることが多いですから、そういう意味では、内容はここまでやらないといけないという目標がなくてもいい。本人が「一生懸命努力をした結果、報われた」と思えばいい。

ヘイリーという家族療法家が、心理治療の構造の典型として「苦行療法」ということを言っています。ミルトン・エリクソンが、不眠症の人に「眠れない時はベッドの横に立って、あなたが読みたいと思っていた本を読みなさい」という指示を出す。次回クライアントが来た時、「どうでしたか？」と聞くと「先生、読めませんでした。寝ちゃってるんです」という話があるんです。これが苦行療法の典型的なものです。「苦行」は動機づけられてないとだめなんです。本人が「やりたい、やるべきだ」と思っている。「苦行をやったから悟りがひらける」というより「苦行をやめたいから悟りをひらく」というパラドキシカルな構造になっています。「無意識で決断」しているから治療的な効果が続くんですね。表では本人は「努力したから悟りがひらけた」と思っていますが、心の中では「症状をやめよう」と無意識で決断しているわけで、私が思うにある種の催眠効果に近い現象が起こってうまくいんだという説なんです。『戦略的心理療法の展開』（星和書店）という本が出ています。

そういう関係のつくり方がポイントだということがわかってきて「これならやれるかな」という感じになっています。「セラピーをやらなければならない」と思っていた頃は大変でしたが、そこが見えるようになって楽になったんです。

しかし、これはあくまで子どもを保護しないと親の動機づけができないという

のが決定的な問題点です。私たちは虐待する親に変わってもらわないといけな
いと思っているだけで、必ずしも子どもを保護したいわけではない。子どもを保護
しないでやれるものならと思うんですが、それが今の法体系では難しい。動機づ
けができませんから。親は子どもを取り上げられているから言うことを聞く、や
る気になってくれるというシステムです。このままだと、やれるケースが限られ
ます。ネグレクトの場合、親は子どもをとられると、最初は「返せ」と言います
が、そのうちにどうでもよくなるということがあるので、これはもっと動機づけ
が難しい。

親を何とかしないと虐待問題は解決しないと思います。私は「児童虐待は児童
問題ではない」と思うのです。子どもは被害者の側です。被害者をどうするかと
いうことは児童福祉の問題だけど、加害者である大人の問題をどうするかという
問題を立てると、必ずしも児童問題とは違うと思えるのです。親に直接働きかけ
る法律が全くないので「修復」が難しいのです。

学校とか保育園から通報があって出かけて行きます。「児童相談所は、いざとい
う時はいつでも保護します」と言うと、向こうは「そんなつもりで通報したの
ではありません」と言われる。「あの親が問題なので、何とかありませんか」とい
うことであって、「子どもは学校に来ているし、2、3か月に1度、傷をつくって
くるけど、施設に行きたいとは思っていない。子どもを施設に入れるなんて可哀相
な」と先生方はおっしゃる。「親を何とかできませんか」ということなんです。虐
待をしている自覚があって、「子どもを叩くのを止められませんか」と悩める親に
ついてはアプローチはしやすいのですが、先生方が親に「ちょっとそういうやり方
はまずいじゃないですか」と言うと「うるせえ、黙っておれ」という親たちにど
うやってアプローチするか。

厚生労働省は「地域ネットワークをつくって、皆で考えてやれ」と言うのです
が、私もネットワークができてない段階では、ネットワークをつくれれば何か
ができそうだと思っていました。私は地域に入るのが大好きですから、地域に入
ってネットワークをつくったんですけど、ネットワークができてみると行き詰まる
んですよ。「見守っている」という状況になって、そこからなかなか介入が
できない。ネットワーク会議は開けるんですが、「子どもに怪我がなくてよ
かったですね。で

もあの親をどうしましょうか」というところはずっと変わらない。周辺から援助はするんですが、肝心の親に対してアプローチができない。ネットワークをつくってまに見守っているだけなんです。時々新聞に「地域が知っていたのに子どもが死んでしまった」という記事が載ります。ああいうのを見るとドキッとするわけですよ。見守っているケースを何ケースも持っていますから。心臓に悪いなというプレッシャーの中でやっている。誰も、たんに見守ってなんかいたくないんです。ただ手がないから見守らざるをえない。そういう時、「子どもが怪我をした、骨折した」とかなると子どもを保護できますが、それだと子どもが虐待されるのを待っているみたいな変な話でしょう。そこからしか親の指導ができないというのはおかしい。そういう愚痴をぶつぶつ言いながら、とりあえずやれるところからの援助を模索しつつ、イライラしながらやっているのが児童相談所の現実です。

もう一つ、親との面接は全部時間外でやりました。ある人の話を聞くと、全部日曜出勤でやっているといえます。「すごいな、そこまではようやらん」「あんだだって時間外だろう」と変なことを競っています。なぜそうなるか。関係の維持が大変なんです。親との関係の維持が大変で、「児童相談所は権威があるからサービスをしなくてもいい」と思われるかもしれないけど、こちらが先手をとって、相手から文句を言われぬような形にしないと、権威が崩される危険性があるので、どうしてもサービスの形ではざるをえない。裁判所の「カウンセリング命令」というのをやってもらえたらありがたいと思います。子どもを保護しているのでいいようなものですが、今は私達の専門性の権威だけで回している。実は子どもを返した後でやったことがあるんですが、これは大変です。危なっかしいです。子どもを1週間だけ保護して返した後、親に「児童相談所に通いなさい」という契約でやったことがあります。これはどんどんサービスして、親とトラブルにならないような形で権威を維持し続けることに神経を使ってざるをえない。神経を使って綱渡りでやっている状況です。正直言って限界があるだろうと思っています。

中村：児童虐待防止法には「親は児童相談所の指導に従わなければならない」と

いう文言が出てくる。その時の「指導」とは何かについて何の術もないなかで、赤裸々に悩んで、ぎりぎりできることをやる、それで行き着いた話をしてもらいました。児童相談所の指導に従ってもらわないといけないが、何をしたいのかわからないという模索、伝統的な心理臨床ではない設定の中で何かをやらざるをえない。つまり親は「相談したくて来ているんじゃない」というパラドックスを、さらにパラドックスで切り返すというあたりの妙、これは技法に入ってきますので、迷路に入っていくようですが、一応そういう文脈は押さえておきたいと思います。その文脈の中で「修復」という言葉がクリアに浮かび上がってくるんですね。

このお二人を紹介していただいたのは団さんです。団さんも発題者にということです。京都府の児童相談所で長らく仕事をされていました。わけあって辞められて今は立命館大学大学院応用人間科学研究科で教鞭をとっておいでです。

団：2001年の末頃でした。三重県津市で愛知県児相での実践のお話を聞いた時、それが十全の取り組みであるとは思わなかったのですが、何もせずに「いかに大変か」という話をしている人たちが多くある中で「こんなことをしている」という話に、意気に感じるものがあつたんです。一昨年、虐待の全国大会が名古屋でありました。どうも児童虐待については「こういうふうに語るものだ」という相互理解がある。「それとは違う角度から児童虐待の話をしてみませんか」ということでシンポジウムをやり、そこへ私を呼んでいただいて何を話そうかと思っていたら、さっき牧さんが言われたようなことが実際に起こったわけです。我が家の隣で突然、虐待が起こった。それで「うるさい」と言ったわけです。こういうことって、ものを呼び寄せますね。皆さんも関心持って考えていると、近々そんな目に合いますよ。大体世の中そういうものです。においをまくんでしょね。関心のある人には見えるし、関心がない人には見えへん。これは世の中の常やと思うんです。

二宮さんがネットワークしたところで、そこからどうなるのかということ話をされました。私のやっていることの話を通して、大きな意味での「修復的アプロ

一ち」の中でネットワークの話をしようと思います。

私はもともと横着な人間でして、書いてあるものを読むと何でも「あ、そうかな」と思う性格があるんです。素直な性格をしている。でも「興味が無いものはちっとも読まん」という、更により性格で。興味の無いことの影響を受けないんですよ。「児童虐待防止法」なんて読んだことないんです。「読んだことないけど、大体書いてあることはわかるわ」と思っている。皆が言うのを聞いてたら「そんなことを書いてあるんやな」と。なんで読まんかという、そんなオモロくないものを読むならもっと読みたい小説があるし、もっと読みたい本があるからです。誰かが仕事で作りあげたものですよ。魂の叫びではなくて「一応これはこうじゃないか」「先生、この文言は過激じゃないですか？」「せめてこれは入れてもらわない」という作業が見え透くような文章は読みたくない。そういうのは研究している人が読んだらいいし、ほんまによりことは誰か私に教えてくれたらいいのです。世の中に流布している文章に全部目を通すなんてのは、強迫神経症です。

自分で考えたらいいと思っています。そして自分で考えてわからんことは読んでもわからんのですよね。これが私の結論です。児童福祉法についても、長年仕事をしてきたけど、ずっと読み通したという記憶はいっぺんもないんです。「児童福祉法もちゃんと読まんと20何年も仕事してたんか？」「それでもできたもん」というのが私。決して不良職員ではなかったですよ。よく仕事してましたよ。にもかかわらず法律のことは知らない。そばにそういうことに詳しい人がおるわけですよ。「団さん、それは違いますよ」とか、「書いてありますよ、法律に」とか、「団さん、知的障害者の更生相談所にて障害者福祉法も読んだことないんですか？」「そや、あれは字が細かい」で終い。そしたら読みにくいならというので、拡大コピーしてくれた人があったんです。でもそういう問題と違う。今、老眼鏡をかけてますけど、その当時は目が悪かったのではない。

そういうことを思う人間ですから、私は何を基本に動いているか。「どうもこれは疑わしい。こんなことは本当とは思えない」という感性の疑念だけで動いている。このところずっと何が疑念かという「こんなに短い期間に児童相談所におる人間の言うことがコロッと変わってしまうような世の中は信用できるはずがない」と思っているわけです。短期にコロッと変わってしまったものは、今後、5

年くらいつと又すっかり様変わりするということです。このリスクを必ず含んでいるんですね。私は家族療法、家族援助のプログラムをやっているんですけど、17年くらいずっと同じことを言うてるんです。「団さん、ずっと同じこと言うてますね。飽きませんか？」という人がおるくらい同じことを言うてる。それが役に立って通用してる限り飽きることなんかないですよ。毎年新しい理論を吐いてる業界人とか学者をたくさん知っていますが私に言わせたら「落ち着きのない奴やな。去年、言うたこと忘れたんか」。これが正しい。新しいニュースをどこから仕入れてきてそれを口にするというのはね、「ウロウロして昨日、こんなことありました」というネタですよ。ネタと人生、ネタと自分の行動理念は別なんです。ネタはオモロいものを引っ張ってきたいんですけど「何を根拠にあなたは動きますか？」と言われたら、少なくとも自分の中に基本というか基準がなければならぬ。それが間違っていたら、その場所から撤退することですよ。言うこと、どんどん違っているのに、相変わらずそこにおるといのは困ったものです。そういう意味では確信の持てることは言えればいい。確信の持てることを「言う」ということは「行う」ということと同じですね。確信の持てることでも言っているだけではインパクトは弱い。しかしそれをやると違う。二宮さんがこんなんやっている。用心しながらやっていると思うけど、二宮方式とか、愛知方式とか言われて誰かが真似しはじめたら引くに引けへんことになるんですよ。何かをやって、人に見えてしまったら責任をとらないとあかんのです。

今、児童虐待の世界で、誰が責任をとるつもりで、どんなことをしているか。確かに何人が「虐待」というレッテルを張られてしまったことを覚悟して生きている人がいますわ。西澤哲さんいうたら「虐待」ということでラベル張られて土日もなく施設に行ったり、心のケアをやったり必死にやってるけど、人にアライバイ工作とか営業戦略と言われようと、それで生きてるわけやから。途中で「このたび私、こっちに店替えしました」とうどん屋始めてもあかんと思う。それで生きて行かな、しゃあない。そういう意味では「あなたは何で自分をやっていきますか？」と言われたら、私のスタンスは児童虐待だけにかかわらず、なんで家族というところでいろいろ難しいことが起きてしまって、うまく暮らしている人たちもたくさんいるのに、もう一方にずいぶん苦しいことを抱えている人たちがこ

んなに増えたのだろう。ほんとうに増えたのか。昔からあったことが今は言えるようになったから、児童虐待だけでなく、子育ての悩みとか苦しみとか、高齢者の介護の問題、障害者を抱えた家とか言えるようになったからなのか。

私が仕事を始めた頃、障害者を家に閉じ込めてはる家族がありました。家庭訪問したこともあります。そういうところに行くと言葉がないですよ。しかしその中でも人は殺したりしないで生きてきた。飼いきりにしていたと言われたらそうかもしれんけど、それでも生きてきた。そんなに人間は短期にコロッと変わったりしないんですよ。言うことだけコロコロ変わってくる。

私は京都府に25年勤めていて、勝手に自分で退職したからクビになったわけはありませんが、この5年くらいすっかり様変わりです。かつて日本の社会は、首切りはめったにしなかったけど、「リストラ」という言い方になったら「なんぼでも辞めさせたらええ」と皆が思っている。私は大いに異論があります。「リストラなんて、言い方だけ変えるな、バカヤロウ」と。世の中、言い方とかラベルを変えると、ついこの間までこだわってできなかったことが簡単にやられてしまう。そういう意味では次々にいろいろ言う世の中の奴を信じていない。ここにおられる専門家も含まれています。「あいつら、言うてるだけや」と思っている。私自身の口も信じてない。何を信じれるかというたら、少なくとも17年たっても家族のことについて言いつづけていることについては、私は私を信じている。

その私を信じていることに基づいて、それに伴う行動についても「自分がした」という範囲においては信用する。したことには結果が出ますからね。やらないで言ったことについては「いろいろご意見もおありでしょう」で終わりですが、言うてやったことについては、相手のあることは結果が出ますから、出た結果についてよかったら、そこからフィードバックする。やったことは少なくとも一つのよい方法のサンプルかもしれないと思えばいいので、自分のやっていることが絶対であるということはない。

こんなことね、法律で守ってもらわなければならないんですよ。国会で決めてもらわんでもええ。国会議員なんて何しているかわかってますやんか。あの人が決めたんですよ。ムネオハウスがどうやと言うてる人が何年か前に「子どもを虐待したらいかん。賛成」と満場一致で決めたんですよ。誰が決めた話か、わ

かりますがな。自分が仕事をしているところでは、私は前からそれを言うてますし、今もそう言うてますということで動いているわけです。

何をやっているか。「地域ネットワーク」はどういうふうにつくられ、どう機能していくのか、本当に信用できるかということはずっと考えています。ネットワーク会議があちこちにあり、フリーになってから、「誰ぞ講演してくれる人ないか?」「あの人やったらあう来るんやないか」と、そういう理由で「団さんも役所におられたからご存じのように、なかなか予算が厳しくて」ということで呼ばれてるんです、私。その結果あっちこっち知ってるんです、全国回る地方公務員という感じで流行ってるんですね。流行っているからよその事情がよわかるんです。わかったことは各都道府県、組織機関によって事情はそれぞれあるけれども、似たようなことで皆、悩んだり、壁にぶつかっている。そこに出てくる言い訳、対策もパターン化している。

このパターンの何がいかんか。私は「新しく出てくるものについて、なぜ信じてないか」と言われたら「新しく出てくるものなんか、まだ新しいその問題について問題点とか、新しいものの限界とか気をつなげなければならない部分が明らかになっていない」からです。皆さんが新製品を買う時と同じです。ソニーがこんなの売り出しました。それがソニーの定番商品になるか。「一時売れ出したけど、最近すっかり見ませんな」となるかもわからへん。ところが昔からある商品は「あそこのあの商品、ええけどね、ちょっと使い心地が悪い。改良した次のものが出たけど売れへんだな」とわかる。定番商品、ロングセラーになっている商品はパーフェクトの商品ではないが、大体、皆が「それならええな」というデザイン、機能、コスト、それについてのエネルギー効率も含めて皆でOKが出ている。新しいものにどんどん取り組んでいく人を私は信じてない。「新しいもん好き」、これだけの話なんです。内容を問わずなんです。外国から導入されてきた言葉にパクッと飛びつく人は家庭生活みたら、今度出た洗剤のいらない洗濯機を一番に買うてる。その割りに洗濯しない奴とか。そういうもんです。

そんなことは今に始まったことではなく、ずっとそうやったということを考えて時、地域ネットワークは地域に昔からあんな。なぜ地域ネットワークが機能しないか。なぜ虐待問題にぶつかった時、機能しないのかということも考えたら、

わかるんです。機能しないやり方がわかっていたら、新しい地域ネットワークをつくるのではなく、機能しない部分をピックアップして、そこを変えたらええ。地域は昔からある。いろいろな団体があるのに新しい団体を立ち上げて、これまでであった団体ですっかりさびれてしまった団体と同じ運命をたどるのはわかってるんです。盛り上がって、盛り上がった中心人物が一身上の都合でそこから引いたら、潮が引いたように消えて「3年ほど前にはこうやったな」ということで終わり。「お金はもらえるようになったけど、補助金もろうてもかなわん、こんな金どうするねんな。ボーリング大会でもしようか」と。そんなことは昔からあるんですよ。そんなものをいくつつくっても、間抜けやな、ということはようわかっている話です。だからそれをやらない。

今ある地域ネットワーク、今ある社会資源を有効に動けるようにする。どうしたらそうなるか。そこに今おる奴を働かせることです。新しい専門家を呼んで、新しい能力を持った人に頑張ってもらうのではなく「お前が働け」。これだけです。「私、十分働いてます」と言うなら「土日も働け」。これです。「ゼストの地下街見てみ。働きたくても職にあぶれたダンボールハウスのおじさんがずっと並んでいる。仕事があるならありがたいと思うて働け」。「でもそれ、具体的にどんなんですか」「学びたいなら金出せ」「予算がない」「お前が出せ」「働くための勉強を自分で金出すんですか？」「あたりまえやないか。お前が働いて給料もらってるなら働く能力を高めるのに自分で自己投資する。常識やないか。県が予算組むのを待ってたらいつなるかわからへんぞ。国は金があらへんし。府県によっては金あらへんからスクールカウンセラーも縮めようと思うてる時期にやな」「お前は金あるやろ」「少しは貯金が」「その金を出せ」「誰に払うんです？」「俺に払え」「なんでや？」「俺はそれが商売や」。

自分のお金を使って自分の時間を使って、自分のエネルギーを使って学んだことで地域社会とか自分の持っているネットワークに貢献する。これをする。「そんなことまでしたくないという人は結構です」と。したくない人ばかり集まってテレビ見ながら「ひどい親がおるな」と言うてたら、今みたいな「見物人社会」になるんです。問題意識を持った人が自分が動けばいい。自分が働かないで、誰かが働いてくれるというのがあかん。大昔から「あなたがやってください」という

ボランティアの呼びかけにもあった。「その誰かにあなたがなってください」これが、未だに通用する。30年も40年も前のボランティアの呼びかけの日本語が今も通用するんですよ。新しいもんなんかつくる必要はない。これが私の基本的な主張なんです。

今日ここで言いたいのは一つなんです。新しいものを立ち上げたら、その新しいものは新しいがゆえに、どんな問題、どんな困難を抱えているかをまだ知らないですよ。やっとぶつかった問題点、困難は、他の場所でそういうことをしたことがある人にとっては「昔からある」「こういうことになる」「こういうことはようあるねん」ということがわかっているということです。そしたら我々は新しいことを始めて壁にぶつかるのではなく、わかっていることをクリアする、次の一歩に踏み出すという、ここの知恵を出せばいいので、この知恵で対応できるのは世の中の諸事全般です。

虐待についてだけ、この知恵があるというのは勘違いです。心は昔からあったし、今もある。心の傷を話題にした時だけ心に傷があるのではない、未来永劫、心の傷もあると思う。今、虐待が流行っていることで気をつけないといかんことがあるということを学んでおくべきやと思うから、今のさまざまな流行もの、皆が口裏を合わせて言うことは好きでない。それを見ていると素人が騒いでいると見えてしまいます。素人はその時その時のことではしゃぐんです。だけど忘れるんです。ブームは素人が起こすんです。

私は「一こまマンガ」を描いてたんですけど、30年くらい前に「一こまマンガの時代が来るぞ、日本人も良質のユーモアを理解する日が来るぞ」と同人誌をたちあげたんですが、そんな日は来ないまま、ついに立ち消えになってしまった。「よいものでも世の中には通じないものはあかん」ということがわかって方針変更せなあかんかと、私と一緒にマンガ描いている連中と言うてるんですけど。「よければ誰かがわかる、これは正しいから皆に伝わるに違いない」と言うてること自体、世の中とか人間を知らないということで、「よいものは具体化して、あんたが世の中にきちっと出せ」ということです。「悪い流行り方をするものには警戒心を持って」。これはずっと昔から言われていることです。そういう意味では児童虐待が悪く流行っている。流行っているということは気をつけないと、後でとんでも

ない後遺症を残すぞと思っている。そんな中で新鮮に面白いなと思ったのは、今日のお二人の話やったり、彼らの実践やったりしたということです。

中村：私はコーディネータですが、お話しもさせていただきます。夫婦間暴力だけではないですが、父親、男性を集めて「非暴力のグループワーク」をしています。

このグループワークは「加害者」という言い方の妥当性は別として、「殴る人」たちです。妻を殴るし、子どもを殴ります。男性だけを集めてやっています。8年前にアメリカでできた家庭内暴力加害者対策の仕組みに出会ってなるほどと思った。一般論ばかり研究していてもしょうがないと具体的な援助実践モデルをサンフランシスコで勉強したんです。先ほど二宮さんが見たというNHKのビデオはロサンゼルスの子童相談所のプログラムです。同じように、家庭内暴力について介入的な援助をしていく。「司法の援助設定」があるんです。勝手に来たい人だけではない。動機のない人を集める。動機のない人を集めるという意味では難しいのですが、やってみると意外にうまくいく。難しいけれども面白い。二宮さんが言うパラドックスと同じです。そんなことを活用しながら取り組んでいます。これも一つの「修復」です。厳罰ではない。刑務所に入れるだけではない。もちろん、刑務所の中に入れても「修復」は必要なんです。傷つけた人との修復、自分の修復、社会やコミュニティの修復などいろんなレベルで必要です。こうした視点は、日本の家庭内暴力対策でも必要になるとあって、これに飛びついたんです。そこで得た言葉が「修復」です。「修復的モデルの探究」ということで、3人の話を含めてまとめていきたいと思います。

私はバタラー（殴る人）へのいろんな取り組みをしているのですが、「加害者援助モデル」を探究したかったわけです。ここで得た言葉が「修復」です。単なる回復だけではない、いろんな傷を抱えながら元には戻らずに生きていく。「再生」「変容」という意味です。

虐待や暴力の意味もわかってきました。変に「トラウマワーク」をするよりももう少し行動に焦点を当てて、行動から入っていく。もし必要ならば心理的な援助に向かっていく。暴力や虐待が彼にとっては必要なんですね。何らかの均衡維

持メカニズムの中に入り込んでいる。しかしそれは社会的には許容できない行動になってきました。法律ができたからです。「逸脱行動」になってきた。「逸脱行動」は何らかの「欲求表出行動」でもある。「注目してほしい」「寂しい」とか。問題行動も現実的にはいい関係をつくっていけば適応的行動でもっといえるんなことができるが、しかし彼らは適応的な行動、社会のルールとなっている行動をとるより、暴力や虐待をした方が今の自分にとっては利得的なんです。それを単純に「人権侵害だからだめだ」と言うことは総論にすぎない。もう少しかみ砕いて「行動」とコミュニケーションスキルにフォーカスすることにプログラムの狙いを定めたんです。

「修復的モデル」にはいくつかのレベルがあると思います。現状では児童相談所の指導に従わなければならないことも内容をどうするかという点では法的根拠はない。夫婦間暴力もそうです。何らかの「司法的な援助」の設定が必要で、その際に「認知の修正」をしなければいけない。「これは虐待ではない」「これは暴力ではない」「これはしつげだ」と思っている認知のレベルをどう修正していくか。言葉にならない感情、牧さんの言葉では「言語以前」のものがあると言われましたが、ある種の感情レベルです。そして、暴力や虐待は具体的な「逸脱行動」ですから、何らかの「行動変容」がないとだめです。こんなレベルでプログラムを1年かけて動かしています。もちろん、配偶者間では、法の強制のない自発的なものです。子どもをとられるというような強制力もありません。

しかし、とはいえ、本来は来たいと思うようなところではありません。来たくて来ている人たちではないのです。でも来た方がいいと思っているという落ち着きの悪さがあります。それが変化の鍵となるのです。しかし、あくまでもその援助設定は、司法によらないとだめだと思っています。それを虐待のケースでは児童相談所がやるかどうかは別ですが、何らかの「援助設定」が必要で、「逸脱行動」をする人たちの動機を形成していくことが必要です。「契約」ということも必要だと思います。「仮免許」を与えるという契約による何らかの導入も必要だと思っています。最終的には「逸脱行動をなくしたい」という目標設定を「自己決定」してもらおう。

対象となる問題行動は明らかに暴力、虐待なんです、その背景にあるものは

何か。貧困、住宅事情、育ちの違い、生活習慣の違い、同じ言葉で意味することのコミュニケーションのズレ、ジェンダーの問題、仕事のストレスなど多様なものが暴力の背景にあります。虐待も同じで、子どもの障害、家族の事情、貧困などです。それを虐待とか暴力というカテゴリーで括ってしまっている。しかももう少し細かく見た方がいい。単に「構造を分析」するよりは、その人が、家族が、何らかの問題行動を必要とする「機能分析」をした方がいいと「前進的な行動修正モデル」を考えまして、一応3段階設定しました。「re-activeな段階」「pro-activeな段階」「pro-socialな段階」で、最後に「積極的な関与」がもっと面白い。このプログラムを私がアメリカで見た時に面白かったのは、このプログラムに来て、虐待親でも暴力夫でも「プログラムを経て、自分は今、見事に再生しました」ということを現役の虐待者の自助グループで語るんですね。彼あるいは彼女は、暴力を通じて社会貢献していることになる。「それを克服してきた歴史があなたにとってはずばらしい」。それをpro-socialな段階と言う。いろんな仕組みを考えまして、当面、怒りが出てくる場合はre-activeな段階への対応が必要です。たとえば、怒りのマネージメントが必要なので、これはスキルを伝えるしかない。Time-out trainingをやる。さらに、自助グループで、他者と関わる能力を身につけてもらう。これはpro-activeな段階での援助です。こうしたレベルを分けて、「漸進的行動修正モデル」と呼んでいます。

しかしいくらその個人を治療してもだめなので、関係性に配慮した、社会モデルが必要です。母親とか父親とかに固着する社会的役割が今、個人を基本にしたものへと変化し、厳しくなっています。殴る男は、「男性性」「男らしさ」にシフトした感情の分布を持っています。「男だからこうすべきだ」ということと暴力や攻撃性が重なりあっています。ですから、その人をいくら追い詰めてもだめで「社会全体が持っている物語を置換していくこと」が同時にないと、つまり、マクロな設定が同時にないと、いくらミクロを設定してもだめなのです。稼ぎ手役割を期待され、妻からも稼ぎがすくないといわれます。男は黙って耐えるべきだ、感情をあらわにはいけないと刷りこまれてきたのです。戦争へと徴兵された男性たち、そして傷ついた、戦場でもひどいことをした、こうした傷の連鎖があります。個人の心の傷だけをみていてもだめだと思います。社会のモデルとして

「修復」という視点をもたなければならないということです。シンポジウムのテーマ設定への私なりの背景です。

牧さんが言われた「関係性の発達障害」という大きな視点。そこから出てきた「虐待と被虐待を切り離さない」「加害と被害を切り離さない」というグラデーションの中でのとらえ方。二宮さんが「とりあえず、児童相談所のフレーム内で何かやらないといかん」と実践された「親プログラム」。団さんが話をされた「ネットワーク」「コミュニティ」「自分でできることは何か」という具合に、話がつながってきたわけです。

議員立法でできた法律ですが、見直しの議論があります。大体、見直せないのが議員立法の常です。見直さずに過ぎるでしょう。そうした時にそれぞれできることをやっていくしかない。私はメンズサポートルームを関西でやり始めた、私にできることはこれなんです。おそらく、団さんの指摘のとおり、男性と暴力、私はこればかり言いつづけることになります。それぞれの立場でできることをやっていく。お上や専門家が何かをやってくれるだろうということではいけないと思います。

ここまで児童相談所の内実を赤裸々に語る人も少ない。牧さんから自助グループに言及された背景あるいは関係性の発達障害を置けばおくほど、精神科医としてのアイデンティティがどうなるのかも含めて、ご発言をお願いします。

牧：自助グループはこの後の流れのことを考えて、私のサービスです。関係性を治していく時、私たちは何をできるかということを考えた時、「一緒に」ということが関係性を結ぶということですよね。「あんた、やりなよ」「私はこういうふうにするから」という形で関係性を改善していくことはできないと思うんですよ。しかも「一緒に」というのはものすごい難しいんですよ。難しいというのはどういうことか。行為だけ一緒にやったって一緒にやったことにならない。私自身は、関係性をやりながら「発達」をすごく考えているんですね。私が西澤さんに批判的なのは、彼は「発達なんか、俺知らねえ」と言われるものですから、すごい腹立ってるんですわ。私たちの心の中に、発達の中に関係性が入ってくるわ

けですよね。たとえば子どもに言うことを聞かせる。「言うことを聞く」というのはどうしてだと思いませんか？「相手にうれしいと思ってもらえる」から言うことを聞くんですよ。命令したから聞くわけじゃないですよ。よくそういう間違いがあるんですね。つまり「あなた」と「私」の間で「あなたの言うことを聞くことがとてもうれしい」「うれしい」という気持ちを共有できるのが「関係ができています」ということでしょう。ところがそれが育ってないんですよ、多くの子どもたちの中に。特に Abuse を受けてきた子どもたちに。Abuse だけでなく。最近、学校に行っているお子さんの中にはこういうのが育ってないお子さんたちがいる。

バトラーの本を読んで「こいつらも関係性が壊れているんや」。私の一番もとは自閉症なんですよ。昔、児童精神科医は自閉症が原点だった。気持ちが通じ合う。気持ちってすごい伝染するでしょう。よくお話するのは誰か一人がイライラしているとアツという間に伝染している。早くイライラに気がつければいいけど、そのまま気づかないでいると、気がついたら喧嘩している、結構。イライラは伝染する。感情は伝染する。私たちは「とっても楽しい、ワーッ」と喜んでいるところに行くと、わけわからんのにうれしくなったりするでしょう？それができない人が、関係性の障害の原点たる自閉症スペクトルなんですよ。Abuse の子どもできない子が少なからずいます。

そこをどうやって回復するかなんです。そのためには「心の方向性が一緒になる」。そういうことをやっていくうちに少しずつ回復していくのじゃないかな。残念ながらこれは教えることはできないんですよ。教育モデルの話をされましたが、多分、それは「社会化しているんだな」と私は思っていました。「社会の代わり」をしてあげるんだなという感じを受けてました。その中で「自立」の話が出てきましたけど、自立はものすごい誤解されていることのひとつで、人とのネットワークができることが自立なんですよ。人を頼りにできるようになったことが自立と言います。一人だけでやっていけるようになったら「孤立」と言います。これもすごい間違えられてるんですね。私たちは結構、多くのことを誤解しちゃっている。新しい言葉が入ってきたことによって、いろんなことをかなり誤解しちゃっている。私たち日本人がつくってきた文化はもっともっと違ってたんじゃないか。私、15、16歳に期待しているのはね。アメリカナイズされた、ヨーロツ

パ化された自助グループじゃなくて、私たちが日本文化として持っていた何かを、もしかしたらそこで取り戻せる、同じ方向に心が動いていくことによって、ちょっと違うものをつくっていけないのではないかと。二宮さんも気がついていて、向こうのものをそのまま入れているわけじゃないんですね。何らかの改変をして、私たちの既定の文化、既定の心に合っているものに入れ替えていくことで「つながり」というものを取り戻していただける。残念ながらどうやったらそれを取り戻せるかわからないのですが。

二宮さんがうまくいっているのはプログラムを、まだ一生懸命考えているからなのです。マニュアル化して「このマニュアルですればいいですよ」とやったら絶対うまくいかなくなると思います。「大変さ」を共有しないと、うまくいかないんですよ。マニュアルは人間関係を破壊するんです。私はそう思っております。そう言えば、団さんと最初に上がった時、マニュアルの話をしてたなど改めて思い出しました。私たちが今、いいと思っているものが、結構、危険な要素を一杯孕んでいるので、そこに気がつきながらやっていければ、もうちょっと違う形ができていくんじゃないかと。子どもを一時保護をされた親の大変さを、いかにこちらが理解して受け止めて、その苦しさを「こっちも苦しいんだけど、やっとなるんだ」というところで共有することができれば、そこで関係ができあがってくるんですよ。児童相談所の一時保護は結構、そういうことをやってた時代ありますわ。法律が援助してくれないから大変だったんですよ。だからこそ、その大変さを共有できた。どっかに肩代わりをしてもらうことで大変さを共有できなくなった時、私たちはちょっと怖いことになっていくのじゃないかなと思っています。

中村：「社会の代わりにしている」というのは面白い表現だなと思って聞きました。プログラムの中身より、そういうことが機能していく局面が大事ですね。私が紹介した配偶者間暴力のプログラムも同じです。やはり直輸入じゃだめなんです。大阪弁でやることです。グループワークを大阪弁でやりますと乗ってくるんです。ローカライズする。そうすると意識せんでも出てくる。そんなことを含めて社会の代わりにする。ナチュラルに自然に「虐待をやめとけ」「うるさい」とい

うような関係で。虐待を予防できない社会になっているとしたら、そういう援助設定を誰かが、どこかでやらざるをえない。「社会の代わり」をしているという立場が必要だと思います。いい言葉だなと思いました。

身体的暴力に限定して話されましたが、ネグレクトも含めて二宮さんから。

二宮：「社会の代わり」、なるほどというか…。私たち心理判定員の研修会の仲間は、それなりに共有した形でプログラムをあちこちで始めているんですが、まだ愛知県の児童相談所全体としてコンセンサスがとれているわけではありません。そういうことをやってうまくいったケースがあると知っていても、たいていは子どもを保護した段階で、果たしてプログラムが効果があるかどうかを見極めてからという感じでやっていますので。こちらが迷ってますとね、向こうと喧嘩になるんです。親は子どもを保護されると一時的に素直になるんですよ。しょうがないと。しかしちょっと時間がたちますと、すぐに向こうもイライラしてくる。こちらが「これは子どもを返せるかな、返せないかな、見通しは」と迷ってやっているうちに喧嘩になる。一度喧嘩になると、とても修復が難しい。児童相談所と保護者という二者関係の中で喧嘩になったら誰も仲裁してくれる人がいません。私なんか、誰か第三者がいて「児童相談所と話をするなら、あなたももうちょっと考えなさい」と忠告してやってくれないかなと。「喧嘩していたら、子どもを返したくても返せんでしょ」と言ってもらえないかなと思います。喧嘩になると向こうも「児童相談所の言うことなんか聞きません」と宣言する。そうすると、子どもを返すに返せずに「最後は28条まで行くか」ということにならざるをえないのです。その前に誰か仲裁してくれないかなと思うようなことがあるんです。

治療システムとしては「苦行療法」の解釈もあるかなと言いましたが、実際はこうした際どい関係からスタートするんです。しかし終わりは面白いですよ。仲良くなってるんです。「最近、児童相談所は大変ですね」と虐待の親から言われるわけです。ニュースで子どもが死んだりしているのを見て「あの人も児童相談所に相談にすればよかったのにね」と虐待している人が言う関係までいっているわけです。だから「大丈夫だろう」と仮免許を出すんですけど。その関係性の変化はまだ私も理論化できないけれども、あるのだろうと。

実は昨日ある所で「地域ネットワークについて」話せと言われて行ってきました。地域ネットワークをつくるのは大好きなんです、今はネットワークをつくって、行き詰まって、どうしようという本音の話がある。それを最初に言うとか講演はぶち壊しになるから、それを言わずにしゃべって「それでも大変なんです」と最後に言わないといけない苦しさがありました。それでも一つ、講演を準備しながら思いついたのは、私たちのプログラムは「セラピーの関係をやめた」ところから成功した。このことってネットワークの中でも同じことが言えるのだなど。地域の保母さん、学校の先生も専門家ですから、虐待というと「トラウマ」という言葉を知ってるわけですね。だから「これはひょっとして虐待ではないか」と思った瞬間から「このお母さん、お父さんには治療が必要だ」と思う。そして「難しい人なんだよね」と先入観で思ってしまったことがある。きっと昔は気楽に「あかんがね、そんなことやとっちゃ」と言える関係があったと思いますが、「専門家がセラピーでもやらんことには難しい人なんだ」と思ったら、ネットワークで「地域で何とかしましょう」と言ってもできはしないんです。問題を難しくしたら地域で面倒見れなくなる。それは専門家の仕事になりますから。

これは登校拒否をやっていた頃にも気がついたことで「登校拒否は心の病気」なんて言っているうちは、登校拒否児は精神科医の仕事、病院の仕事であり、地域の仕事ではなかったんですね。「登校拒否はそんなものじゃない。健康な子どもなんだ」という話になって地域で面倒見れるようになったのと同じことが言える。そうした見方を変えていくと、地域のネットワークの中で「子どもを家においたまま、在宅でどう支援するか」ということが見えてこないかなと思いました。

「社会の代わりに関係を変えてきた」と言われて、そういう視点でも見直してみようかなと思えて、いい言葉を聞いたなと思っています。ネグレクトの話はまだ正直、しゃべれる段階ではないので、難しいかなと思っています。

中村：「社会の代わり」という牧さんのとてもいい表現を受けて、二宮さんがやっていることの中で、それがどういう機能なのかなということを考えてみたい。専門家や虐待システムが入れば入るほど擦じれた問題を余計拗らしているなという感じもするので、そこをもとに戻して関係性を再構築する、そんな話だと思います。

団さんも家族療法やネットワークで、団流ネットワークもありますので、具体的にどういうふうにするにすればいいのか。教師なら教師、保母さんなら保母さんがアクティブに何かできることをやるというのはどういうことか。団さん流のネットワークの仕掛けなどについて。

団：「こんなふうにやったらいいんです」という話よりも、先週行ってきた沖縄の宮古島の話をしたと思います。そこはねエリアで5万人くらい人がいるんですって。沖縄県の児童相談所の管轄で那覇からジェットで45分かかる。そんなところに出張で公務員は来ない。金がかかってしょうがないから。旅費の問題で1年に5、6回が限度ですと。5万人いるところに児童相談所が現実に機能していないという感じやと思っただけなんです。ずっと昔から「児童相談所をつくってくれ」という声があるわけです。地域社会の要望です。しかしそれで20年も30年も50年も児童相談所なしでやってこれたということは、実は児童相談所はなくてもいいということです。宮古の子だけ偏ってえらいことになっていたらいかんけど、そうじゃないからね。沖縄県が「まあまあ」「ごもつとも」と言いながら所長や課長が代わっていく。相変わらず建っていない。ここに「児童虐待のネットワークづくりで宮古は遅れる」とまたワツと声上がる。「児童相談所の職員の配置を、出張所、支所をつくれ」と。しかし結論は同じなんです。

私に言わせると、そんなことをしても一時保護所も何も無い、一人だけ職員をおいても「その人たちが大して機能しない出張所ではあかん。本格的なものを立てろ」となるのは全国あちこちに見えていることだから、それ自体むだやというのが私の結論なんです。世の中の問題解決、要求というものの自体がそうです。「児童虐待が大変やから人を増やせ」と青森県では児童相談所職員が5年くらいで3倍以上になった。20人が60人か70人になった。だけど青森が他に比べてすばらしいところになったということはない。青森が大変やということはよく知っています。「急に人が増えたら大変やわ」と皆、言うてます。問題提起と問題解決のための方策が一致しない。問題がなくなったためしがないんですよ。なぜかという、私らも含めて皆、バカだからですね。考え方、変えたらええわけや。変えるのは何か。相手に向かって「あんたが変われ」。登校拒否している子どもに「学校行け」

というのと同じで、そんなバカな話はないわけやから、もうちょっと賢い変化をせんといかん。地域社会の変化論は、そこが因果論とシステム論の違いという話になるのですが。

今、言うた話は皆、因果論で、「誰が悪いからこうしないといかん」という形で問題提起して解決手段をつくりだしていてもちょっとよくなる。「具体的対策はこうだ」ということを地域で暮らしている人が、ご近所の人が「こうしたらええやんか」というのでやってしまう。身近な役所の人間が「とりあえずこうしてみてん、あかんでもともとや」とやってしまう。そういうところから実は人間の暮らしは変化しているところがいくらかあって、誰も知らない専門家が、どこから来て、専門家のいるところだけがよい社会になるということは実例として、ない。

宮古に行く時に飛行機の横を飛行機雲が走ったんです。その飛行機、分離をしそこねて藻屑と消えたA2ロケットですよ。世の中不思議なものに遭遇するなんて思って、あんなすごいものでも凶面の書き損ないで失敗した。そんな世の中なんですから「大層なことをせんでも、できることしたらええ」というのが、これが私の地域のネットワークで、今、何ができるということの結論で、中村さんが思ったことと全然違った話になりましたが、失礼いたしました。

中村：「修復的モデルの探究」の結論は今、出ないはずだし、変に結論を出してマニュアル化しても仕方がない。一つの方向性として見定めておきたいテーマです。3人の話をそれぞれエキスとして引き取りながら打ち出していきたいと思っているテーマです。モデルとなるとまたマニュアル化するので、それぞれができること、教師なら教師、保育士なら保育士、学者なら学者ができることを、もっと見定めらうかということです。そんなことの第一歩にたくて、今日はわざわざ名古屋からお越しいただきました。

児童相談所もいろんなことをしているはずなんです。子どもが死亡するたびに叩かれるばかりで、地道な活動が目に入ってこない。そこを見極めたほうがいい。専門性とは何か。やるべきことは何か。マスコミのせいで「虐待」というカテゴリーですべて括ってしまっていないか。これはぜひ反省したい。牧さんが死亡事

例60ケースとか数字を出されましたが、もっと厳密に見た方がいい。「虐待」というカテゴリーに踊らされているところもある。それは虐待している親もそうです。専門家も含めて振り回されるところがある。もう少し覚めた目で見てはどうか。見極めをしつつ、しかし「社会の代わり」を、誰かが、何かを果たさなければならぬとしたら、何が出来るか。「親プログラム」とか代替的な援助の仕組みが必要ではないかと思います。そんな文脈で整理しておいていただき、引き続き「修復的モデルの探究」を追求したいと思っています。